

【報告】

看護学生が日常生活経験と看護についての学びから 看護についての考えを形成していくプロセス —一人暮らしを始めた学生のインタビューより—

須藤みつ子*¹ 平川美和子*²

(2017年9月10日受付, 2018年9月16日受理)

要旨: 目的: 一人暮らしをしている看護学生の, 日常生活と学びから看護に対する考えを形成していくプロセスを明らかにし, 看護基礎教育の示唆を得ることである。方法: 看護学を専攻している大学1年生10名を対象に, 看護を学んだことによる日常生活の捉え方を中心に半構成的インタビューを行い, 分析は修正版グランデッドセオリーを用いた。結果: 『過去の経験と看護の学びとの結びつきを考える』『環境調整についての学びと日常生活とをつなげて考える』『食事についての学びと日常生活とをつなげて考える』『他者に対する理解の仕方について看護の学びと日常生活とをつなげて考える』『一人暮らしゆえの日常生活経験から看護の学びを考える』『看護師像に対する捉え方について考える』を, 双方向の関係によりプロセスを形成していた。考察: 学生の経験と学びとのつながりを意識した教育的関わりを行うことが看護観を形成するであろうという示唆を得た。

キーワード: 看護学生, 日常生活経験, 学び, 看護観

I. はじめに

看護活動は, 人間と環境とを相互作用させながら健康の維持・増進に向かう独自の活動である¹⁾。つまり看護師は, 日常生活という環境の中で生活を営む対象の生活世界との間に相互作用する独自の性質を持つ存在と考えることができる。

その上で, 看護師が対象の日常生活をどのように捉えるかは看護観を形成する要素の一つとなると考える。このことは看護観について, Wiedenbach²⁾が, 「哲学」とは看護婦ひとりひとりの信念や行為にもとづく生活や現実に対する態度であり, 看護婦の行為の動機づけになって, 何をすべきかを考えるのに役立ったり, 何かしようと決意するのに影響を与えたりするものである, と述べていること, 石津³⁾が, 看護観は看護者の行為選択の基準となり看護の質を左右するものとなる, と述べていること, また, 人間はものごとの意味に対して意味を形成し, その意味ののっとなって行為する存在であり, ものごとの意味は個人が仲間とともに参加する社会的相互作用から導き出される⁴⁾とされることを裏付けとして言える。薄井⁵⁾は, 看護観は看護実践を支えるものであり, 看護の正しい発展には方法論や技術論のみならず看護観が必要であると述べ, 畑中⁶⁾は, 看護師が体験により内的に形成された看護観を意識した看護

ケアの実践を積み重ねることで看護観を発展させていること, そして看護師自身が自己の看護観を発展させていく必要があることを述べており, 看護観の適切な形成と発展の重要性を説明している。また工藤⁷⁾は, 看護に対する考えは専門職業人として行動をとるための基盤となると述べていることから, 学生の時代に形成した看護観は, 将来の看護師としての姿に影響する重要な要素であると考えられる。

看護学生(以下, 学生とする)の看護観についての研究では, 臨地実習の経験に着目したもの⁸⁾, 科目学習前後の変化に着目したもの⁹⁾, 学生時代に培った看護観を基準とし看護師は「自分育て」をしていくこと¹⁰⁾などが報告されている。学生は科目の学習の進行, また臨地実習や日常生活のさまざまな経験を重ねることにより看護観を形成し, 臨床看護の場で修正や追加など変化させることで, 看護実践の土台としていと考えられる。このように日常生活の経験が看護観の形成に影響することが示唆されるものの, 具体的に学生の「日常生活経験」に着目した研究は少ない。野村¹¹⁾は, 日常生活における生活体の姿を自然的態度と説明し, 「日常生活者は日常の様々な出来事が現に目の前にあらわれている姿以外のものであるかもしれないという疑念をあらかじめ封じ込めてしまい, 当たり前のこととして感じてしまうのであり, 日常的レベルにおいて, 反省的な態度で現象を見定めることは難しい」と述べている。このことから, 日常生活に支障をきたした対象の日常生活を考えていく立場にある看護師が, 日常生活に対してどのような考え方, 捉え方をしているかを知ることは, 看護基礎教育における看護観の育成について考えることにつながる。

筆者ら¹²⁾は学生が日常生活援助の視点を養っていくプ

1 介護老人保健施設ヴィラ弘前 Health Facilities For The Elderly Villa Hirotsuki
〒036-8073 青森県弘前市岩賀 2-12-11 TEL:0172-37-7300
2-12-11, Iwaka, Hirotsuki-shi, Aomori, 036-8073, Japan
2 弘前医療福祉大学 Hirotsuki University of Health and Welfare
〒036-8102 青森県弘前市小比内 3-18-1 TEL:0172-27-1001
3-18-1, Sanpinai, Hirotsuki-shi, Aomori, 036-8102, Japan

Correspondence Author: lalcalut7@jomon.ne.jp

プロセスについて、家族と同居している学生を対象に調査した。その中で学生は日常生活経験と看護の学びとのつながりに気づき、意味づけすることを軸とし、日常生活援助の視点を養っていることを明らかにしている。その上で、現代の若者が利便的な生活環境の中で日常生活を営むことから推測される生活経験の変化、日常生活の日常性ゆえに当たり前に感じてしまうということが看護として生活者である対象を捉えていくことに影響するのではないかという危惧の観点から、看護の対象を生活者として援助していく視点を意識的に養う教育の必要性を述べている。

そこで、本研究では一人暮らしをしている学生を対象に、日常生活と看護の学びとから看護についての考えを形成していくプロセスについて調査することとした。

II. 目的

一人暮らしをしている学生の、日常生活と学びから看護に対する考えを形成していくプロセスを明らかにすることで、日常生活と看護の学びに着目した教育方法の示唆を得ることである。

III. 用語の定義

1. 看護観：看護をどう捉え、考えているかとする。
2. 日常生活：看護の学び以外の、日常的な各個人の営みとする。
3. 看護の学び：看護教育に必要な科目としての学びとする。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、学生の日常生活における経験と、看護の学びとは、双方向に意味づけ作用しあう関係であるという観点に立ち、一人暮らしをしている学生の看護を学んだことによる日常生活におけるものの捉え方を明らかにしていく質的帰納的研究である。

2. 調査方法

1) 研究対象者

A 大学で看護学を専攻している1年生のうち、大学入学を機に一人暮らしを始めた学生で、研究に参加協力の得られた10名であった。

2) データの収集方法

調査は、看護を学んだことによる日常生活におけるものの捉え方について、インタビューガイドに沿って半構成的インタビューを行った。面接時間は30分程度を予定し、学生が十分に語る事ができたことを確認できた時点で終了とし、実際の面接時間は20～30分であった。インタビューの時期は、平成27年12月であった。

3) 分析方法

本研究は、学生の日常生活と看護の学びとは、学生の体

験世界を取り巻く様々な社会的環境が多側面に意味づけられて、双方向に形成されているという観点に立っている。このことは、学生が体験世界を営んでいくプロセスにおいて、看護を学んだことによるものの捉え方を作用させていることを意味する。そこで本研究では、社会的相互作用およびプロセスを構造的に捉えるのに優れている修正版グラウンデッドセオリー¹³⁾を用い、「看護を学んだことによるものの捉え方」を分析テーマとした。分析は、質的研究歴を有する複数の研究者で客観性を確認しながら行った。

V. 倫理的配慮

本研究は研究者が所属する機関の研究倫理委員会の承認を得て実施した(No.72)。該当する対象年次学生全員に、研究の主旨を文書と口頭で説明した。研究参加は自由意思であること、参加・不参加により、またインタビューの内容や参加状況など、研究に関する一切のことは学生の成績には影響がなく公平性が確保されること、インタビュー内容はレコーダーに録音すること、得られた情報は他に見えないように厳重に管理し、研究目的以外には使用しないこととデータ整理が終了した段階で破棄すること、表記にあたっては個人が特定されないようにすること、研究は発表すること、研究参加はいつでも撤回できることを、文書と口頭で説明し、同意書にて承諾を得た。インタビュー実施日時は、学業、学生生活に影響のない日時を学生の希望を優先し、個人情報を保つためにインタビューは個室で行った。

VI. 結果

1. 対象学生の概要

研究協力者の基本属性は、男性2名、女性8名であった。一人暮らしを始める前の同居家族構成を表1に示す。

表1 対象者の一人暮らしを始める前の同居家族

対象者	性別	同居家族構成
A	女性	父. 母. 姉. 妹. 弟.
B	女性	父. 母. 弟.
C	女性	父. 母.
D	女性	祖母. 父. 母. 弟.
E	女性	祖母. 父. 母. 妹.
F	女性	父. 母.
G	女性	祖母. 父. 母. 妹.
H	女性	母. 兄. 妹.
I	男性	父. 母. 妹.
J	男性	祖父. 祖母. 父. 母. 弟.

2. 分析結果

- 1) ストーリーライン (図1)

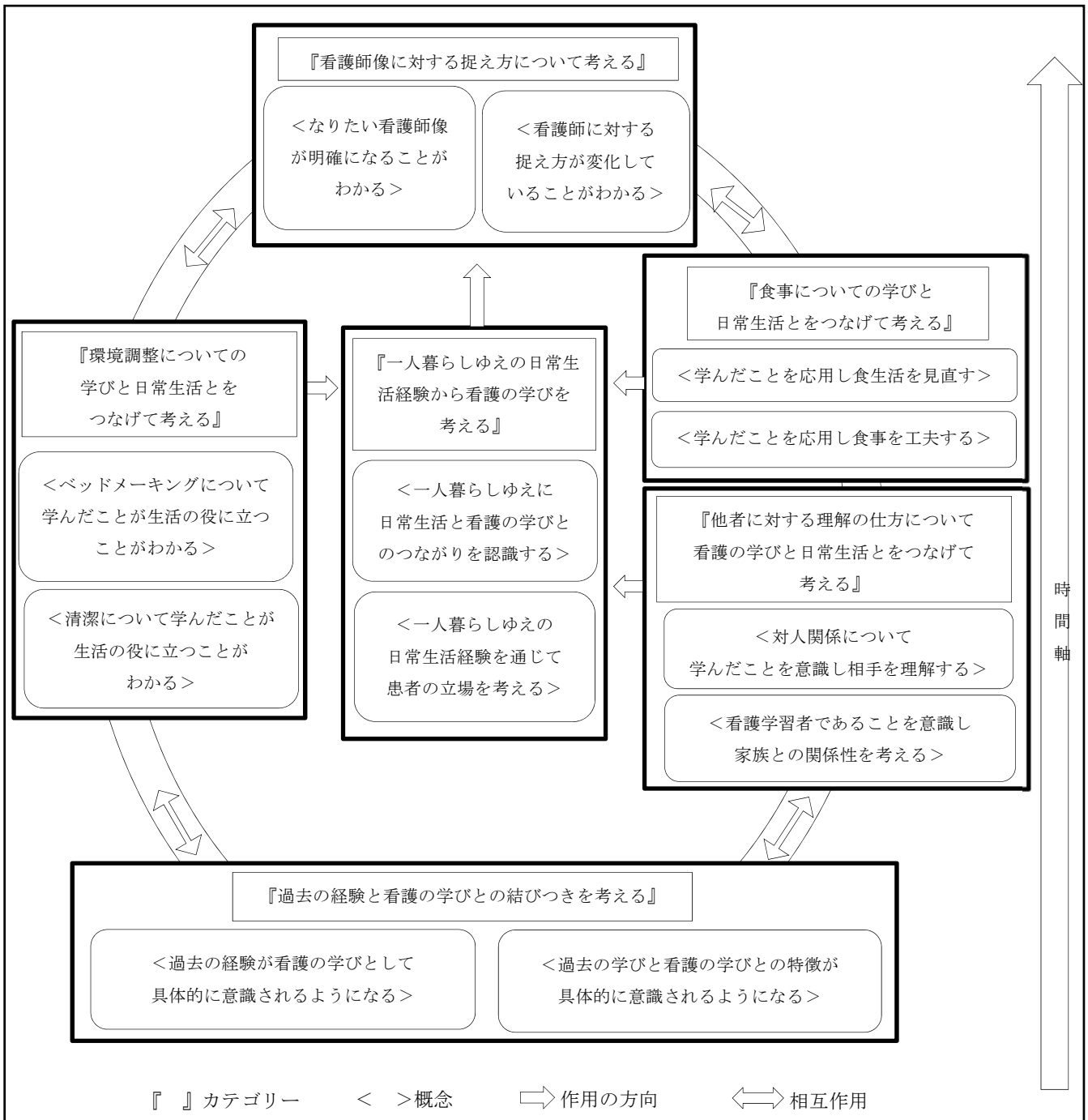


図1 一人暮らしの学生が日常生活と看護の学びとをつなげて看護に対する考えを形成していくプロセス

以下、カテゴリーを『 』,概念を< >で表記する。

一人暮らしをしている学生は、看護の学びと経験との関係性に気づくことや意味づけをし、一人暮らしゆえの日常生活経験をもとに看護を考えることを通じて、日常生活経験と学びから看護師像を考えることをしていた。

一人暮らしをしている学生は、看護を専門的に学習する以前の経験を振り返り、これまでは意識されてこなかった<過去の経験が看護の学びとして具体的に意識されるようになる>こと、<過去の学びと看護の学びとの特徴が具体的に意識されるようになる>ことで『過去の経験と看護の

学びとの結びつきを考える』ことをしていた。また、学んだ看護技術や知識を日常生活に意識的、無意識的に応用していることを認識することや、意味づけすることで<ベッドメイキングについて学んだことが生活の役に立つことがわかる>こと、日常生活を整える上で<清潔について学んだことが生活の役に立つことがわかる>ことで、『環境調整についての学びと日常生活とをつなげて考える』ことをしていた。健康と食事との関係について<学んだことを応用し食生活を見直す><学んだことを応用し食事を工夫する>ことで、『食事についての学びと日常生活とをつなげて考

える』ことをし、衣食住という生活の基本的要素と学んだ看護について意味づけて考え、日常生活に応用していた。また看護独自のコミュニケーションに関する科目で学習したことを意識し日常生活において＜対人関係について学んだことを意識し相手を理解する＞こと、自分が看護学習者となったことで変わった家族との関わり方について＜看護学習者であることを意識し家族との関係性を考える＞ことで、『他者に対する理解の仕方について看護の学びと日常生活とをつなげて考える』ことをしていた。このような日常生活と学びとの関係について、一人暮らしをしている今を振り返りながら＜一人暮らしゆえに日常生活と看護の学びとのつながりを認識する＞こと、自分が一人暮らしを営む生活者となったことで患者を生活者として捉え＜一人暮らしゆえの日常生活経験を通じて患者の立場を考える＞ことをし、『一人暮らしゆえの日常生活経験から看護の学びを考える』ことをしていた。このように、日常生活経験と学びとの共通性や類似性、相違性とを対応させながらつなげて考え、さらに一人暮らしをすることで認識し得た学びとのつながりを発展させ、看護師に対する捉え方に目を向けくんだり看護師像が明確になることがわかる＞こと、＜看護師に対する捉え方が変化していることがわかる＞ことで『看護師像に対する捉え方について考える』ことをしていた。

2) 概念とカテゴリー

(1) 『過去の経験と看護の学びとの結びつきを考える』

看護を専門的に学ぶ以前に経験したことや学んだことを振り返り、看護について学んだこととの関係性を模索したり気づいたり、意味づけをし、つながりを認識する内容である。「やっぱり守秘義務ってあるんだなってこととか、いろいろ、看護過程論かな。本当にこれはまじで実践されてるんだって。」と、これまでは情報として認知されていたことについて、看護を学んだことにより感じ得た真実性を確認することや、「今まで自分がやってきたことも全部それなんだなって、これが倫理かみたいなの。」「看護の勉強をしていくと死には理由があって、(以前はわからなかった)段階とかもあるのを知ったので、その専門的なことを学んで、(家族が亡くなったことにも)死にはちゃんと理由があって、その段階に気づいていくことが看護師にはできるから、ちゃんと勉強したいなって思います。」と、これまでの考え方を学んだ看護の視点で具体的に認識し、＜過去の経験が看護の学びとして具体的に意識されるようになる＞ことをしていた。また「そこは別に看護としてやらなきゃいけないことで、あと介護では生活のいろいろやったので似たり寄ったりのところはある。」と、看護学習以前に介護として学んだ知識、経験と、看護の学びとを対応させ、共通点や相違点について考える＜過去の学びと看護の学びとの特徴が具体的に意識されるようになる＞ことをしていた。

(2) 『環境調整についての学びと日常生活とをつなげて考

える』

看護技術として学んだ環境調整に関する知識や技術と、自身や家族の生活とを照らし合わせて考える内容である。「ベッドのリネンも今まで全然気にしてこなかったんですけど、そういえばホテルとか病院とかでもきれいにしてるなって。作り方がわかったので、こうやってたんだなって気づきがありました。」と、ベッドメイキングの方法と根拠を意識して自分の寝床を整えることに活かす＜ベッドメイキングについて学んだことが生活の役に立つことがわかる＞こと、「(窓の棧を掃除する時)清拭とかでやった、ここ(指)に巻いてっていうのはやりましたよ、指バージョンで。一番使うことは、風呂の髪が排水溝に髪の毛がたまって、ゴム手袋やって取り外す時、あれ使います。片方取って、片方沈めて。」という、清潔な生活環境を整えるために＜清潔について学んだことが生活の役に立つことがわかる＞ことをしていた。

(3) 『食事についての学びと日常生活とをつなげて考える』

食事と健康に関し学んだことと、自身や家族の生活とを照らし合わせて考えることや、食事を選択したり調理する時に役立っている内容である。「やっぱり甘いものは良くないって、そういう知識増えてから、ちゃんとバランス良く食べようって心がけるようになりました。」と、人体の解剖生理と身体的発達と食事とを照らし、学んだことの中で意識されたことと自分の食生活とを対応させ＜学んだことを応用し食生活を見直す＞こと、「一般的な情報、一般人からの目線。でも大豆だし大豆は健康的、B先生の授業でやったかな。」と、これまでは一般的な目線で食品を捉えていたが、授業の内容と照らして食品の捉え方が変化していることを認識することや、「たしか看護学原論の時に、なぜA県が短命県なのかっていうのを調べていて、そしたらアルコールとか、喫煙とか、味濃いのがあったので、それは意識するようにしました。」と、学んだ知識を新たに意識し健康的な食事を工夫する＜学んだことを応用し食事を工夫する＞内容であった。

(4) 『他者に対する理解の仕方について看護の学びと日常生活とをつなげて考える』

看護独自の人間の理解の仕方について学んだことと、これまでや普段の友人関係や家族関係と照らして考える内容である。「偏見を持たれることがすごい嫌いなんですけど、自分もそういうことをしたら同じ人になるのかなって思ってた。倫理で習ったことは授業でなく、やっぱり日常生活でも大切なことだなって思います。」と、自身の経験で感じていたジレンマに対し、看護独自の人間の捉え方を照らし、そして納得しく対人関係について学んだことを意識し相手を理解する＞ことをしていた。また「(おばあさんが)腰とかも悪くしたり、ちょっと風邪だと思うんですけど、そういう症状あったり、頭痛とかそういうちょっとしたことで電話はしてくるようになりました。何か変わって、何かわ

かんないんですけど、これから歳とるから宜しくなって言われると、勉強しなきゃなって。」と、学生が看護学習者であることを意識し、家族が関わっていることを認識するなど看護学習者であることを意識し家族との関係性を考える>ことをしていた。

(5)『一人暮らしゆえの日常生活経験から看護の学びを考える』

一人暮らしをしているからこそ、日常生活と看護の学びとのつながりを認識し得ていると考える内容である。「そういうのはやっぱり一人暮らしだから考えちゃうんだなって。空き時間が多くなった。一人だから、それで、あーって考えることが多くなりました。そういう看護のこと。」と、日常でおきた出来事を看護について学んだ観点で捉えることができるのは、一人暮らしゆえの時間が背景にあると考えることや、「手洗いのタオルとか何回も拭いていけば、菌いっぱい居ると思うので、いつも換えています。今だれもやる人いないんで、自分からやってる。」と、一人暮らしの生活を組み立てていく上で、自ら思考し行動しなければならない状況と、看護について学んだこととを照らしく一人暮らしゆえに日常生活と看護の学びとのつながりを認識する>ことをしていた。また「何も知らないよりは患者さんも生活していくんだなって考えた時に、たぶん自分が一人暮らしだったら、どうしなきゃいけないとか、生活のやらなきゃいけないこととか、どういうことが大変だとか、そういうの教えられるけど。」と、一人暮らしの経験があるからこそ患者の生活を考えることにつながっていると認識し、<一人暮らしゆえの日常生活経験を通じて患者の立場を考える>ことをしていた。

(6)『看護師像に対する捉え方について考える』

学生の日常生活経験と学びを通じて、これまで考えていた看護師像の変化を認識する内容である。「いまだに看護師自分できるか自信があんまりないんですけど、精神面傾聴、一人で生活してるってだけでも結構鍛えられていると思うんですよ。(中略)だから看護のこれからの勉強として、自分自身のメンタルを強くして立派な看護師になれるようになれたらと思っています。」と、一人暮らしの生活を通じて内面が変わってきた自分と、なりたい看護師像の方向性とを対応させるくなりしたい看護師像が明確になることがわかる>こと、「看護師さんを前よりすごい気にしてみるようになって、結構きつい人ばかり見てたから、そういう感じかなって思っていたんですけど、やっぱり見学実習して一緒にいていった時に一人一人接し方が違って、あー苦労しているんだなって思いました。」と、実習を通じ看護師の姿から学んだことと、以前の日常生活で感じていた看護師像とを振り返り、看護師像を変化させ<看護師に対する捉え方が変化していることがわかる>ことをしていた。

Ⅶ. 考察

長谷川ら¹⁴⁾は、看護初学者の時期に看護への興味関心を深め看護への意識付けを強めることが、その後の学習を左右すると述べ、「看護とは何か」「看護師として大切にしたいこと」を示す看護観をもつことで基礎教育機関の学習に対する動機づけとなると述べている。

本研究の結果は、一人暮らしを始めた看護初学者が、看護を学習する以前から現在までの日常生活経験と、看護の学びとの間で何らかの関係性を模索したり、新たな関係性に気づいたり、意味づけをし、応用することで、日常生活援助に対する認識を深め、さらに看護師像についての捉え方に目を向け、日常生活と学びをつなげて看護に対する考えを形成していることを示している。以上のことは、人間はものごとの意味に対して意味を形成し、その意味ののって行為する存在である⁴⁾ことから導き出されることができ、さらに、得られたプロセスは、何らかの形で看護観の形成に作用していると考えられる。

『過去の経験と看護の学びとの結びつきを考える』について考える。伊藤¹⁵⁾は、学生が看護教育の場以外の経験で築いた“自分自身の人生経験にもとづいた援助観”は、看護教育の場での援助観の形成を“積み上げていく土台となるもの”と述べており、また田村¹⁶⁾は、看護教育の場はそれまでの生活過程で培われたその人なりの認識の仕方を土台に、看護者としての専門的な認識の仕方へ発展させることを目指すものと述べている。これらのことと日常生活における自然的態度¹⁷⁾とを合わせて考えると、本研究の結果は看護初学者における日常生活援助の視点を養うプロセスであるとともに、看護観を形成していくプロセスでもあることを再考することができる。つまり日常生活そのものを学びとして認識することや、意識して考え実践するという経験が、日常生活援助に対する視点を養うことにつながり、さらに看護に対する考えの形成につながると推測される。Beard&Wilson¹⁸⁾は、学習と経験は切り離して考えることはできない概念であると指摘し、経験によって既存の知識・スキル・信念が修正・追加されることが学習であると述べている。また Benner¹⁹⁾は、初心者は直面している状況を過去に経験したことがないので、どのように行動するべきか導いてくれる原則を与えてもらう必要があると述べている。日常生活における学びの視点に初めて会う学生が、双方向のつながりを意識できるような動機づけや刺激を与える教育の必要性を示唆していると考えられる。

『環境調整についての学びと日常生活とをつなげて考える』『食事についての学びと日常生活とをつなげて考える』について考える。今回得られたベッドメイキングとしての寝床を整える、清潔な環境を整える、健康的な食事を整えるは、いずれも日常生活援助技術であり、そして学生の日常生活を整えることにおいても身近なことと認識され、また経験できる場面が比較的多いことが、学生が日常生活と学びを具体的につなげて考えることを導いたと考えられる。

学生にとっての身近さとわかりやすさのつながりの関係性を意識した教育の重要性を示唆していると考えられる。さらにこのカテゴリーに関する語り、『過去の経験と学びとの結びつきを考える』との語られ方の関係が、「確認」や「共感」という形であったことは、インタビューという場で語ることを通じて自分の内面を見つめ、そこから新たな気づきや考えの発展につながったのではないかと考える。鷲田²⁰⁾は、注意を持って聴く耳があってこそ始めて言葉が生まれ、聴く側の心持や準備、そのベースがなければ、真にその言葉を受け取ることができないと述べている。インタビューの場が、学生と教員との互いの傾聴的な態度や会話であったことが、次への気づきや促しの会話を導いたのではないかと考える。

次に学生が日常生活において、看護技術の学びを意識して見るように変化していたことについて、技術の本質に触れながら日常生活経験における看護技術の応用を考える。技術について、武谷²¹⁾は、技術とは人間実践（生産実践）における客観的法則性の意識的適用である（意識的適応説）と述べている。そして“技能”は主観的・心理的・個人的なもので熟練によって獲得されるのに対し、“技術”は客観的・組織的・社会的なものであり、知識の形で個人から個人へと伝承することができ、社会の進展に伴ってしだいに豊富になってくるものであること、看護技術の修得には、技能と技術の相補的な関係が必要である²²⁾と報告されている。つまり、学生がこれまでの日常生活では意識していなかった行為について、新たに学びの視点で気づいたり、見つめなおすという行為は、日常生活経験という個々の行為と、知識の形として個人から個人に伝承されていく技術としての看護技術の学びとを融合させるプロセスであり、意識的に日常生活と学びとを適応させているプロセスと捉えることができる。看護初学者はこのようなプロセスを経て技術を技能に転化させる方法を身に付けていることが明らかになった。今後の課題としては経験や学習を重ねることによってその方法がどのように変化していくのか探索する必要がある。

また、教育と経験との間には必然的な関係があり、経験の連続性は経験の価値によって影響され²³⁾、学習は経験とその成熟であり、その本質は意味である²⁴⁾。その上で授業は教えた事柄が学生に理解され、知識としてその後の学習や看護の実践の中で活用されなければならず²⁵⁾、また授業設計とは最小限のポイントだけを明確にし、学習者の動きにあわせて臨機応変に指導するための基礎作業である²⁶⁾。個々異なる学生の日常生活経験と学びとを、経験、教育、学習との連続性に働きかけていくにあたり、看護学習者は成人学習者であることから、これまでの経験は学生の能力を発揮するための学習資料となることは着眼点であると考えられる。その上で、学生の経験自体を教材にすることは、学生の経験と乖離した現象を用いるよりも目標達成を容易に

する²⁷⁾ことと、また学生の表現力が乏しいと直接的経験の明確化が進まないため、学生は日頃から自身の表現力を向上させていくことが求められる²⁸⁾。さらに学生が「看護」に対する自らの認識を持ち、それを自らの言葉で表現し発展させていくことは非常に重要である²⁹⁾。これらのことから、学生が看護に対する認識を言葉で表現できるような表現力を身に着けるような教育が、看護に対する自らの認識を持ち、発展させていく上では必要であると考えられる。経験と学びとが具体的に向き合う場面や気づき、意味づけのきっかけとなるものを意図的に設定し、学生にとってわかりやすい言葉に置き換えて説明するとともに、学生が事象を表現することを教育することが、学生が看護に対する考えを形成していく一助となると考える。

また、学生の看護観形成には授業内容や指導を受ける教員の看護観が大きく影響している³⁰⁾が、教員の看護観についての研究は少なく、今後の課題と考える。

『他者に対する理解の仕方について看護の学びと日常生活とをつなげて考える』について考える。看護は人間関係を基盤とし、全人的な関わりが求められる³¹⁾。よって対象をどのように理解するか、理解の仕方や考え方は、学生においては看護を学んでいく上での土台でもあり、自分が他者から理解され社会的に相互作用していくための要素であると考えられる。また、人間関係は日常生活を営む上での基盤と言える。その上で、看護初学者の時期から、看護の基盤である対人関係について学んだことと日常生活に関して思考することは、生活体験が少ない傾向を有する現代の若者である学生にとって、対人関係に関する学びを日常生活に持ち込み、価値観や看護観を変化させていく体験であると考えられる。看護観形成過程に影響した要因について、実践経験が5年以上の看護師を対象とした研究において、これまでの看護観やそれに基づく方法では上手く対応できずに自己の看護観と向かい合うことが求められた体験に対して、問題解決のために体験に適應する看護を探し続けたり、内省したり、他者に相談することで自己の看護の考え方を広げていたことが述べられている³²⁾。看護初学者にとって限られた臨床経験の場である実習において看護に対する考え方を深められるような関わりとともに、学内外における人との関わり形成、自分自身を内省し理解すること、また学生にとって看護師として身近な存在としての教員と成長的な人間関係を形成していくことの重要性を示していると考えられる。

また、これまで高校生だったものが、高等教育機関である大学に進学し看護という職業性の高い学問を学ぶ存在に変化していくことは、当事者の社会的役割の変更はもちろん、家族機能の側面から考えると、家族にとっても家族成員の一員の社会的役割の変更を伴う出来事である。家族との同居から一人暮らしに変化したことで、家族に対する認識が変化することや、家族が学生を看護学習者として意識

し関係性を構築していく背景には、個々の家族成員の行動が他の家族成員との相互関係で成立し³³⁾、学生が家族成員の中で看護学習者として双方向に意識され、相互作用していることが考えられる。家族との関係性や経験については、家族関係が良いと感じることは自分の存在価値を他者に認められるという根源的な欲求であり人間が生きる力となる³⁴⁾と述べられており、学生が看護学習者として家族の中で意識し、意識されることは、離れて生活している学生と家族が相互に存在を認め合うことにつながっていることを示唆していると考えられる。

『一人暮らしゆえの日常生活経験から看護の学びを考える』について考える。このカテゴリーは日常生活経験について生活の背景から学びとのつながりを考える内容である。本研究の対象者は、大学入学を機に一人暮らしを始めた学生であり、新しい生活背景の中で生活を組み立てることで、看護について学んだ身近な生活に関することについて、考え感じ、経験すること、つまり自身の生活世界に看護学習者という役割を持ち込み、価値観を変化させ、相互作用させていると考えられる。また、これまで家族と生活を共にしていた思春期から青年期にある学生が一人で生活を組み立てるということは、生活者である学生が環境への対応の仕方の変化を伴う出来事である。昨今の家族形態が核家族化などにより人間関係が希薄になっていることや、若者の生活体験が少なくなっている社会的状況を考えると、新しい生活環境に対し生活者として、学ぶ存在として、また前述したように家族成員の一員として適応していくことは、学生が発達課題に対処し、自己を確立していく上で意味が深いと考えられる。また、学生の日常生活スキルとストレス対処との関連について、日常生活スキルを獲得している者においてストレス対処能力が高いこと、その中でも“前向きな思考”“計画性”など個人的スキルがストレス対処能力と関連が強く、ストレス場面においては認知的再評価や問題解決という方略でコーピングしていることが述べられている³⁵⁾。さらに学生が情報を捉えていく力について、看護に関する経験や知識の習得だけでなく、それまでの生活歴なども影響を与えるという可能性と、対象の生活を支えることを目的としている学生自身の生活を大切にすることの必要性を述べている³⁶⁾。これらのことから、学生が自身の日常生活を整えていく姿勢が、学習者としての姿勢、看護を考えていく上での一つの要素であることを示唆していると考えられる。

『看護師像に対する捉え方について考える』について考える。このカテゴリーは学生がこれまでの経験と学びとのつながりから、看護師に対してこれまで不明確であった認識を、学びから得た知識や知恵、日常生活と学びとのつながりから、確実な対象として修正することや、これまでとは性質の異なる捉え方に変化させていくことを意味すると考える。入学直後から1年間の間の学生の看護観は、理論

家や既知の定義などに大きく影響を受け、学生自身が捉える看護観にはなっていないこと、看護基礎教育課程において学生が様々な経験や体験の中から自分の看護観を明らかにしてけるような環境を整備することが必要である³⁷⁾と述べられている。また看護観は看護の理論や知識、経験からのみ生じるのではなく、個人的価値観を専門家としての役割に持ち込まれたものである³⁸⁾と述べられている。看護初学者は専門的な学習や看護師を目の前にできる実習の経験が少ないこと、また若者である学生の生活体験の特徴を考慮し、個人的価値観を看護学習者役割に持ち込めるように、初学者である学生に対し看護師である教員が役割を示すことや、導くことが必要と考える。

ここで、教員は学生の日常生活において身近な看護師であるにも関わらず、学生の語りにおいて、看護師という教員に関する語りが見られなかったことは、学生が日常生活において教員を看護師として認知していないことを示唆すると考える。学生が日常生活において教員を看護師として認知できるような関わりが教員に求められると考える。田中ら³⁹⁾は、熟練看護教員は生涯発達しつづける存在として実践の中で内省し、ライフイベントも含めた経験の中でキャリアを描き続けながら力量を形成していることを述べている。学生が看護観を形成し発展させていく上で、看護教育における教員の看護観、教育観、学生観の重要性とともに、その基盤にある教員の力量形成の重要性を示唆していると考えられる。

VIII. 結論

1. 一人暮らしを始めた看護学生は、看護学習以前からこれまでの経験を、看護学習者として、また一人暮らしをしている生活者として、学んだ看護の視点で双方向に作用させ、総合的に意味づけ考えることで、看護に対する考えを形成していたと考えられる。
2. 看護基礎教育において、学生の経験と学びとのつながりに着目し教育することは、看護観の形成につながるであろうという示唆を得た。
3. 学生の看護観が正しく形成されていくためには、教員の看護観、教育観、学生観とともに教員の力量形成が重要であることの示唆を得た。

IX. 本研究の限界と課題

今回の結果は、男子2名、女子8名の計10名の限られた学生から得られたデータであり、一般化には限界がある。また、本研究に先立ち実施した家族と同居している学生を対象とした調査の結果とあわせて検討し、看護基礎教育について深めていくことが課題である。

謝辞 本研究に参加協力頂いた、A大学、看護学科の学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

利益相反 本研究実施にあたり、開示すべき利益相反はありません。

引用文献

- 1) 松木光子: 看護学概論看護とは・看護学とは. 第5版. p.1-28, ヌーベルヒロカワ, 東京, 2010.
- 2) Ernestine Wiedenbach: 臨床看護の本質—患者援助の技術. 外口玉子, 池田朋子訳. p.28, 現代社, 東京, 2003.
- 3) 石津みえ子: 看護基礎実習における看護観の育ち. 看護教育, 36(3):245-251, 1995.
- 4) Blumer Herber: シンボリック相互作用論 パースペクティブと方法. 後藤将之訳. 第1版. p.1-6, 勁草書房, 東京, 2005.
- 5) 薄井坦子: 科学的看護論. 第3版. p.128-132, 日本看護協会出版会, 東京, 1997.
- 6) 畑中純子, 伊藤収: 看護観が体験から発展するまでの看護師の思考プロセス. 日本看護科学学会誌, Vol.36:163-171, 2016.
- 7) 工藤二郎, 小田日出子, 上野恵子, 他: 看護のアイデンティティ(最終章) 看護学生, 新人看護師, 年長看護師3集団の看護観の分析より得られた教育上有用となりうるキーワード. 西南女学院大学紀要 Vol.14:1-8, 2010.
- 8) 當間 彩: 看護学生が臨地実習で看護観を培っていく過程—看護学生時代に看護師の言動から受ける影響—. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 看護教育研究会集録. No.39:81-88, 2014.
- 9) 立石有紀, 岩本真紀, 近藤美月, 他: 看護学生の看護観の形成過程—看護学概説, 看護理論の科目前後における看護観の変化から—. 香川医科大学看護学雑誌, 6(1):63-67, 2002.
- 10) 栗田孝子, 橋本麻由里: 学士課程の看護教育を考える 卒業時の学生が捉えた「看護観とその形成に影響を及ぼした事項」から. 椋山女学院大学看護学研究, Vol.2:17-22, 2010.
- 11) 野村一夫: リフレクション 社会的な感受性へ. 第1版. p.58-68, 文化書房博文社, 東京, 1994.
- 12) 須藤みつ子, 平川美和子: 看護学生が日常生活援助の視点を養うプロセス—日常生活経験と看護の学びとにおける認識変容に着目して—. 弘前医療福祉大学紀要, 8(1):59-66, 2017.
- 13) 木下康仁: グランデッドセオリーアプローチへの実践. 第1版, p.25-30, 弘文堂, 東京, 2003.
- 14) 長谷川真美, 村上弘之, 菅沼澄江, 他: 「看護覚え書」を用いた初学者の看護観育成のための教育方法の検討. 東邦医療大学紀要, 3(1):12-20, 2013.
- 15) 伊藤良子: 看護学生の人生経験に基づいた「被援助体験」と「援助観」. 京都市立看護短期大学紀要, 第37号:109-119, 2013.
- 16) 田村房子: 臨地実習における看護学生の看護者としての認識への発展過程の構造. 千葉看護学会誌, 6(2):47-53, 2000.
- 17) 再掲 11)
- 18) Colin Beard & John P Wilson: The Power of Experiential Learning. p.13-39, Kogan Page, 2002.
- 19) Patricia Benner: ベナー看護論. 新訳版 初心者から達人へ. 井部俊子訳. p.18, 医学書院, 東京, 2005.
- 20) 鷺田清一: 「聴く」ことのカー臨床哲学試論. 阪急コミュニケーションズ, p.163-165, 東京, 1999.
- 21) 竹谷三男: 弁証法の諸問題. p.132, 勁草書房, 東京, 1968.
- 22) 茂野香おる, 他: 系統看護学講座専門分野 I 基礎看護学(2)基礎看護技術 I. 第16版. p.2-15, 医学書院, 東京, 2017.
- 23) John Dewey: 経験と教育. 市村尚久訳. p.29-76, 講談社, 東京, 2004.
- 24) 藤岡完治: 関わることへの意志 教育の根源. 国土社, p.44-45, 東京, 2000.
- 25) 佐藤みつ子, 宇佐美千恵子, 青木康子: 看護教育における授業設計. 第4版, p.24-32, 医学書院, 東京, 2013.
- 26) 梶田叡一, 加藤明: 形成的評価による授業設計マニュアル. p.10-18, 第一法規, 東京, 1986.
- 27) 山下 暢子, 舟島なをみ: 看護学実習における学生の「行動」と「経験」の関連 行動概念と経験概念のメタ統合を通して. 看護教育学研究, 15(1):20-23, 2006.
- 28) 小田亜希子, 武藤雅子, 小林幸恵, 他: 看護大学生の看護観に関するテキストマイニングを用いた分析. 活水論文集 看護部編, 第3号:3-21, 2015.
- 29) 関谷 由香里, 和田 由香里, 青木 光子, 他: 看護学生の「看護」に対する認識の変化(第2報). 愛媛県立医療技術大学紀要, 3(1):51-57, 2006.
- 30) 再掲 8)
- 31) 再掲 21)
- 32) 再掲 6)
- 33) 鈴木和子, 渡辺裕子: 家族看護学—理論と実践—. 第2版. p.18-23, 日本看護協会出版社, 東京, 2003.
- 34) 杉山智春: 看護学生の家族関係と共感性及び自尊感情との関連について. 母性衛生, 49(4):484-491, 2009.
- 35) 高橋ゆかり, 本江朝美: 看護学生の日常生活スキルとストレス対処との関連. ヘルスサイエンス研究, 17(1):51-54, 2013.
- 36) 船木由香: 場面から情報を捉える力の変化—看護学生の学年による違い—. 日本保健医療行動科学会雑誌, 31(2):52-60, 2016.
- 37) 再掲 8)
- 38) Thompson J.E, Thompson H.O: 看護倫理のための意思決定 10のステップ. ケイコ・イマイ・キン訳. 日本看護協会出版, 東京, 2004.
- 39) 田中千尋, 岡崎美智子: 経験の語りにもみる熟練看護教員の力量形成過程. 日本看護学教育学会誌, 26(2):29-41, 2016.

【Report】

**The Process of Nursing Students Developing Their Views about
Nursing and Their Experience in Their Daily Lives
— From the Interview by Which Nursing Students who Live Alone —**

MITSUKO SUTOU *1 MIWAKO HIRAKAWA *2

(Received September 10, 2017 ; Accepted September 16, 2018)

Abstract:

Aim: The objective of this study was to clarify the process by which nursing students who live alone developed their views, and to obtain suggestions for basic nursing education.

Method: Semi-structured interviews were conducted with ten nursing students and the interview data were analyzed using a modified grounded theory approach.

Result: The results revealed that the process by which nursing students developed their views about nursing and their experience in their daily lives while living alone and studying nursing was comprised of the following: ‘thoughts concerning past experience with nursing study’, ‘thoughts concerning the arrangement of surroundings to fit nursing study into their daily lives’, ‘thoughts concerning the study of nutritional care in their daily lives’, ‘thoughts concerning the study of methods for understanding others and their daily lives’, ‘thoughts concerning the reason for living alone while studying nursing’, and ‘thoughts regarding the view of nurses’.

Conclusion: The results of this study suggest that educational programs for nursing students that include direct experience with nursing would cultivate the nursing students’ views about nursing.

Keywords: Nursing students, Experience in daily lives, Study, View about nursing